

そせい法師

〔古今和歌集<sup>一</sup>〕花さかりに京をみやりてよめる、見わたせば柳櫻をこきませて都ぞ春の錦なりける

〔倭訓栞<sup>前編</sup>  
美<sup>三</sup>三十〕みやこ<sup>中略</sup> かりの宮所をもみやこといひし事、豊前京都郡など日本紀に見え、又萬葉集に見ゆ、

〔筑前國續風土記<sup>六</sup>御笠郡〕大宰府舊地○中鎮西府と云しも即此所なり、古歌にしづむる西の都とより、又都督府とも西の都ともいへり、

〔續日本紀<sup>三十</sup>稱德〕神護景雲三年十月甲辰大宰府言此府人物殷繁天下之一都。會也、

〔織錦舍隨筆<sup>上</sup>〕東の都といふ詞

此江戸をさして東都と文字に書るは都會都邑などいふ字義によりて博士の輩の書そめたる事にて、二百年ばかりこなた書なれたり、扱これを大和ことの葉にあづまのみやこといふ事は、縣居の翁の文にはじめてか、れたり、おのれ是をおだしからすおもひて、むかし翁にとひしかばげにもみやことは、宮所の義なれば、みさとの外をさしていはんはいかゞなれど、今は世の上中下の人おしなべて、東都としも文字に書なれれば、殊更に我より改むべき事とも覺えず、がかる名目の類は世に從ふ事も有習ひなれば、暫世に書なれたる文字を訓のまゝによみてあらんもとがなかるべし、文をあやなす上には、江戸とのみいひては、よからぬいきほひもありといはれき、これいとうきたる事のやうなれど、詞を轉じ用たるには、昔よりかゝる例なきにしもあらず○下

〔松屋棟梁集<sup>一</sup>〕東都稱呼辨

とりがなくあづまのみやこといへる稱は江戸名所記羽に車、借りありて都ならでは牛車はなかりしを、江戸はあづまの都にて牛車をゆるされ、いかなる土橋板橋のうへをも心のまゝにひくとかやと見ゆ、いかなる土かまくらの禪興寺の鐘のことがき